

第Ⅱ章 研究の具体

以下の資料について、それぞれ略称を用いることとする。

答申：「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」平成28年12月21日中央教育審議会

総則：「小学校学習指導要領 総則編」及び「中学校学習指導要領 総則編」平成29年告示 文部科学省

国研資料：「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料」令和2年3月 文部科学省国立教育政策研究所 教育課程研究センター

資料A：「学習指導要領の趣旨の実現に向けた個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に関する参考資料」令和3年3月 文部科学省初等中等教育局教育課程課

（※P〇）…第19次研究1年次研究紀要参照ページ

当研修センターでは、第19次研究として、「指導と評価の一体化」を目指し、研究内容を前述の(1)、(2)、(3)に分けて、実践研究を進めることとした。今年度はその2年次であるため、1年次の研究の成果と課題（「第19次研究1年次紀要」※P73）を生かし、以下のように研究内容の重点を定めることとした。

(1) 目標と評価の一体化

- (1.1 単元目標の明確化) (1.2 目標と評価の位置付け)

(2) 指導計画・評価計画

- (2.1 単元構成の工夫) (2.2 1単位時間の学習過程)
(2.3 形成的な評価（指導に生かす評価））

(3) 個別最適な学び、協働的な学び

- (3.1 個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実)



上図は、上記の研究内容と単元との関連性を示している。後述では、上図と合わせながら2年次での重点について、具体的な実践も含めて示す。研究内容(1)、(2)、(3)の詳細については、「第19次研究1年次紀要」（※P6～21）を参照頂きたい。

(1) 目標と評価の一体化

研究内容(1)を述べるにあたって土台となる考え方については、「第19次研究1年次紀要」（※P6～9）を参照頂きたい。ここでは、今年度重点としている「単元目標の明確化」と「目標と評価の位置付け」についてこれらが求められている背景と、具体を示していく。

(1).1 単元目標の明確化

目標と評価の一体化を図る上で、単元目標を明確にする必要がある。それは、右図からも分かるように、単元で身に付けさせたい資質・能力（山の頂上）が明確になることにより、教師の手立てはより精選され、児童生徒の学習の方向性も定まると考える。



(1).2 目標と評価の位置付け

では、この目標と評価がどのような位置付けとなっているかを示す。参考とした資料には、以下のように示されている。

各学校において目標に準拠した観点別学習状況の評価を行うに当たっては、観点ごとに評価規準を定める必要がある。評価規準とは、観点別学習状況の評価を的確に行うため、学習指導要領に示す目標の実現の状況を判断するよりどころを表現したものである。

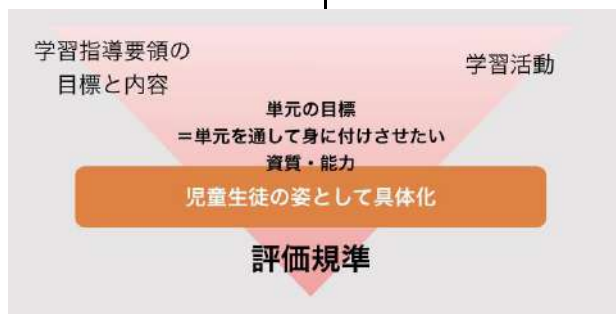
国研資料「第1章 平成29年改訂を踏まえた学習評価の改善」より抜粋

このように目標と評価の位置付けを述べる上では、評価規準が重要となる。また、評価について答申では以下のように示されている。

○ 「目標に準拠した評価」の趣旨からは、評価の観点については、学習指導要領における各教科等の指導内容が資質・能力を基に構造的に整理されることにより明確化される。

答申「第9章 3. 評価に当たっての留意点等」より抜粋

以上の内容から、当研修センターでは右図のように「各教科の学習指導要領の目標と内容」と「学習活動」を踏まえた「単元の目標」を設定し、その目標をより児童生徒の姿として具体化した内容を「評価規準」とした。その上で、誰もが目標に準拠した評価を行うことができるよう評価規準を設定する過程を以下①～③のようにおさえた。



- ① 参考資料「内容のまとめりごとの評価規準(例)」を用いて、各教科、単元に対応する評価規準を参照する。
※全教科に準ずるものではないため、②の過程から設定する場合もある。
- ② 各教科、単元に応じた「学習指導要領の目標と内容」を参照する。
- ③ 単元で構想する「学習活動」や「児童生徒の実態」を踏まえた上で、②と③を行き来し、①について児童生徒の姿としてより具体化できる部分を修正する。

上記の具体的な内容については、【実践資料】(右記記載)を参照頂きたい。

【実践資料】

小4 社会科指導案
P3、4

中2 数学科指導案
P2、3

小4 算数科指導案
P3、4

中1 外国語科指導案
P3～5

(2) 指導計画・評価計画

研究内容(2)を述べるにあたって土台となる考え方については、「第19次研究1年次紀要」(※P6～9)を参照頂きたい。ここでは、今年度重点としている「単元構成の工夫」と「1単位時間の学習過程」、「形成的な評価(指導に生かす評価)」が求められている背景と、具体を示していく。なお、ここでは主に「学習評価」の側面に焦点をあて説明する。「学習指導」の側面については、「(3)個別最適な学び、協働的な学び」(P5)で詳しく説明する。

(2.1) 単元構成の工夫 2 1単位時間の学習過程

指導計画について、答申では以下のように示されている。

(単元等のまとまりを見通した学びの実現)

- また、「主体的・対話的で深い学び」は、1単位時間の授業の中で全てが実現されるものではなく、単元や題材のまとまりの中で、例えば主体的に学習を見直し振り返る場面をどこに設定するか、グループなどで対話する場面をどこに設定するか、学びの深まりを作り出すために、子供が考える場面と教員が教える場面をどのように組み立てるか、といった視点で実現されていくことが求められる。
- こうした考え方のもと、各学校の取組が、毎回の授業の改善という視点を超えて、単元や題材のまとまりの中で、指導内容のつながりを意識しながら重点化していけるような、効果的な単元の開発や課題の設定に関する研究に向かうものとなるよう、単元等のまとまりを見通した学びの重要性や、評価の場面との関係などについて、総則などを通じて分かりやすく示していくことが求められる。

答申「第7章 2.『主体的・対話的深い学び』を実現することの意義」より抜粋

以上のような内容から、当研修センターでは、指導内容のつながりを意識しながら重点化していくことができる効果的な単元の構成を目指した「単元構成の工夫」と、効果的な課題の設定を目指した「1単位時間の学習過程」を重点とした。どちらにおいても、児童生徒が見通しをもって学ぶことができることが重要である。

(2.3) 形成的な評価(指導に生かす評価)

上述の答申には、「評価の場面との関係などについて、総則などを通じて分かりやすく示していくことが求められる」ともあり、指導計画と評価計画の関係性は深いといえる。また、評価計画について答申では以下のようにも示されている。

- 学習評価は、学校における教育活動に関し、子供たちの学習状況を評価するものである。「子供たちにどういった力が身に付いたか」という学習の成果を的確に捉え、教員が指導の改善を図るとともに、子供たち自身が自らの学びを振り返って次の学びに向かうことができるようにするためには、この学習評価の在り方が極めて重要であり、教育課程や学習・指導方法の改善と一貫性を持った形で改善を進めることが求められる。

答申「第9章 1. 学習評価の意義等」より抜粋

以上の内容から、当研修センターでは、教師の授業改善や児童生徒の学習改善を目指し、単元を通して指導と評価を繰り返し行うことを目的とした「形成的な評価（指導に生かす評価）」を、単元や1単位時間の中で効果的に位置付けていくことが必要であると考えた。

「形成的な評価」の充実に向け、以下のような視点で「単元構成の工夫」を行った。

形成的な評価の充実に向けた「単元構成の工夫」

- ・単元内の複数の学習活動の関連性を整理し、まとまりをつくる。

（例）社会科：つかむ、調べる、まとめる・生かす

数学科：単元の見通し、習得、活用・探究 など

※R5年度「小4社会科」「中2数学科」研究授業指導案より例示

- ・学習活動と評価規準との関連性を整理し、学習活動のまとまりごとに、児童生徒の資質・能力がもっとも効果的に育成されるであろう学習活動に対応する評価規準を位置付ける。

ただし、1単位時間で全ての児童生徒の資質・能力を育成することは難しい。そのため、単元の中で同様の評価規準を複数回位置付け、その評価をもとに学習改善が必要な児童生徒に対して手立てを講じ、全ての児童生徒が目標を達成することを目指した評価計画を各指導案に作成した。

「形成的な評価」の充実と「1単位時間の学習過程」との関連については、上記で示したような評価規準の設定をもとに、1単位時間の中での評価を「対象（何を）」「場面（どこで）」「方法（どのように）」という視点で具体化を図った。そうすることにより、教師が児童生徒を評価する視点が定まり、学習改善が必要な児童生徒に対して適切な指導を行うことができると考えた。上記の具体的な内容については、【実践資料】（右記記載）を参照頂きたい。

【実践資料】

小4社会科指導案
P4、6、8、9

中2数学科指導案
P4、6、7～9

小4算数科指導案
P4、5、7、8

中1外国語科指導案
P5、7、9～11

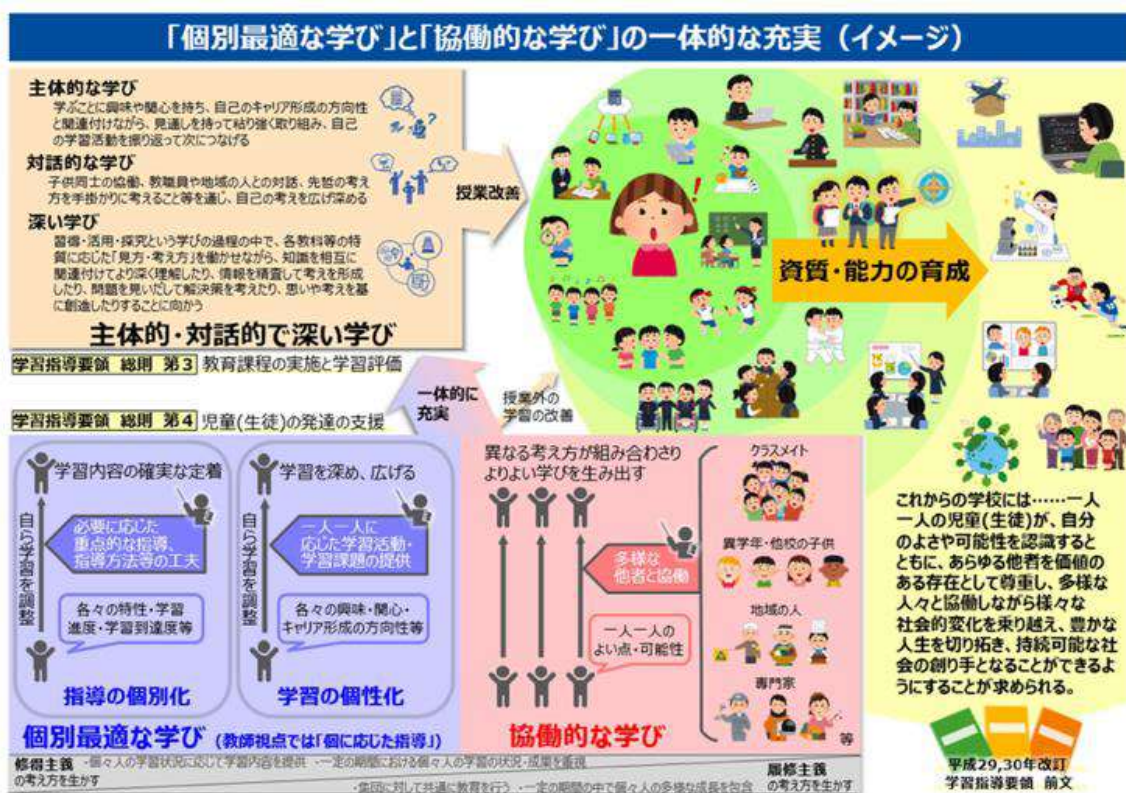
(3) 個別最適な学び、協働的な学び

研究内容(3)を述べるにあたって土台となる考え方については、「第19次研究1年次紀要」(※P9～21)を参照頂きたい。ここでは、今年度重点としている研究内容(3)「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」について、これらが求められている背景と具体を示していく。説明に伴って、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を以下のようにおさえる(資料Aより抜粋)。

全ての子供に基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させ、思考力・判断力・表現力等や、自ら学習を調整しながら粘り強く学習に取り組む態度等を育成するためには、教師が支援の必要な子供により重点的な指導を行うことなどで効果的な指導を実現することや、子供一人一人の特性や学習進度、学習到達度等に応じ、指導方法・教材や学習時間等の柔軟な提供・設定を行うことなどの「指導の個別化」が必要である。

基礎的・基本的な知識・技能等や、言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力等の学習の基盤となる資質・能力等を土台として、幼児期からの様々な場を通じての体験活動から得た子供の興味・関心・キャリア形成の方向性等に応じ、探究において課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現を行う等、教師が子供一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供することで、子供自身が学習が最適となるよう調整する「学習の個性化」も必要である。

探究的な学習や体験活動などを通じ、子供同士で、あるいは地域の方々をはじめ多様な他者と協働しながら、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、様々な社会的な変化を乗り越え、持続可能な社会の創り手となることができるよう、必要な資質・能力を育成する「協働的な学び」を充実する。



資料A「2(3)個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」、「参考『個別最適な学び』と『協働的な学び』の一体的な充実イメージ」より抜粋

(3).1 個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実

資料Aでは、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善において、個別最適な学びと協働的な学びに関する授業改善の視点を以下のように示している。

個別最適な学びを充実していく上では、基礎的・基本的な知識・技能の習得が重要であることは言うまでもありませんが、思考力、判断力、表現力等や学びに向かう力等こそ、家庭の経済事情など、子供を取り巻く環境を背景とした差が生まれやすい能力であるとの指摘もあることに留意が必要です。主体的・対話的で深い学びを実現し、学びの動機付けや幅広い資質・能力の育成に向けた効果的な取組を展開していくことによって、学校教育が個々の家庭の経済事情等に左右されることなく、子供たちに必要な力を育てていくことが求められます。例えば、児童生徒の学習意欲を向上する観点からは、教科等を学ぶ本質的な意義や一人一人の学習状況を児童生徒に伝えること等が重要となります。

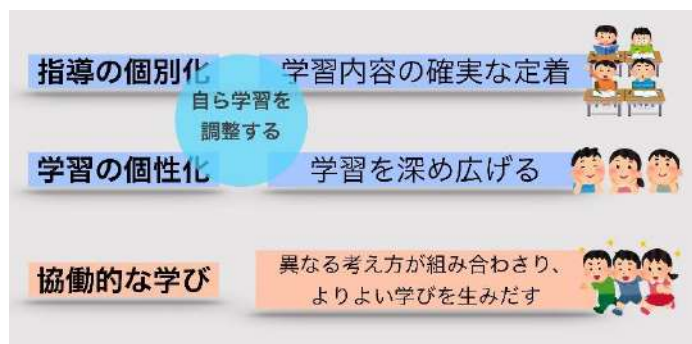
「協働的な学び」においては、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善につなげ、児童生徒一人一人のよい点や可能性を生かすことで、異なる考え方が組み合わせたり、よりよい学びを生み出していくようにすることが大切です。例えば一斉授業においても、集団の中での個人に着目した指導や、児童生徒同士の学び合い、多様な他者ととも問題の発見や解決に挑む授業展開などの視点から授業改善を図っていくことが期待されます。また、学習内容の理解を定着する観点からは、単に問題演習を行うだけではなく、内容を他者に説明するなどの児童生徒同士の学び合いにより、児童生徒が自らの理解を確認し定着を図ることが、説明する児童生徒及びそれを聞く児童生徒の双方にとって有効であると考えられます。個々の児童生徒の特性等も踏まえた上で、「協働的な学び」が充実するようきめ細かな工夫を行うことが重要です。

資料A「4(1)①個別最適な学び・協働的な学びと授業改善」より抜粋

上記の内容をふまえると、児童生徒が自らの学習を調整しながら自分に適切な学習方法を選択したり、様々な考えを組み合わせたりしながらよりよい学びを生み出していこうとする姿が求められている。そのためには、右図のように、資質・能力の育成に向けて児童生徒の実態を幅広く捉え、様々な児童生徒の学び方に対応した柔軟な学習活動が必要となると考える。そこで当研修センターでは、研究内容(2)の重点である「単元構成の工夫」や「1単位時間の学習過程」という視点で具体を示していく。ここで提案する内容については、各教科で汎用できる内容である一方、単元構成を限定するものではないことをご理解頂きたい。



前述の内容を踏まえると、個別最適な学びと協働的な学びの目的は右図のように整理することができる。



まず、個別最適な学びの内、「指導の個別化」は学習内容の確実な定着をねらった手立てである。そのために教師は、必要に応じた重点的な指導、指導方法等の工夫を図る。それにより、児童生徒は各々の特性・学習進度・学習到達度等を把握し、自ら学習を調整しながら資質・能力を高めていくことができる。そこで、「単元構成の工夫」という視点で以下のような要素を取り入れながら授業づくりを行った。

【指導の個別化】

- ① 児童生徒が、学習課題を解決するための見通しをもつことができる手立てが取られている。
- ② 児童生徒が、主体的に学習を進めるための手段（学習環境の整備、自由な学習方法の選択が可能、十分な学習時間の確保）が整えられている。
- ③ 児童生徒一人一人が自分の学習履歴を残すことができる手立てが取られている。
- ④ ICT が効果的に活用されている。

①については、児童生徒が学習の見通しをもつことが重要となる。「研究内容(1).1 単元目標の明確化」(P 2)とも関連するが、単元の目標や学習活動が明確になることにより、児童生徒の学習の方向性が定まる。教師や仲間とともに単元全体の学習計画を組み立てることにより、学習活動が自分ごととなり、自分にとって必要となる学習方法や時間等を選択していくことにつながると考える。

②については、児童生徒が自ら学習を進めようとした時に、そのために必要な学習環境が整えられているかが重要となる。例えば、課題を解決するために必要な情報を集めようとする際、教科書や本を参考にした児童生徒もいれば、インターネットや他者との対話を必要とする児童生徒もいることが想定できる。児童生徒は、学習方法や時間等を柔軟に活用できることにより、自分に適した学び方を見つけていくことができると考える。

③については、児童生徒が自分に適した学び方を見つけていくために、自分が取り組んできた課題解決の方法や、その結果を振り返ることが重要となる。前述の例と同様に、情報を集めるために教科書を選択した児童生徒がいたとする。集めていた情報を整理していくが、課題の解決に結びつかない。その状態に気づき、自分が必要とする情報は何か、そのためにはどのような方法で情報を集めることが適切かを見直してい

くことが必要となる。その際、学習履歴を残していくことで振り返りが可能となり、自分に適した学び方を見付けていくことができる考える。

④については、前述の②や③のように学習を進めるためには、児童生徒一人一人のニーズに応えたり、学習履歴の蓄積を行ったりすることに効果的であるとする。また、教師が一人一人の児童生徒の学習状況等を把握し、適切な指導をしたり、学習環境を整えたりするためにも有効であるとする。上記の具体的な内容については、【実践資料】(右記記載)を参照頂きたい。

次に、個別最適な学びの内、「学習の個性化」は学習内容を深め広げることをねらった手立てである。そのために教師は、児童生徒の興味・関心・キャリア形成の方向性等に応じて、児童生徒一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供することが必要となる。それにより、児童生徒は自身の学習が最適となるように調整しながら資質・能力を高めていくことができる。そこで、「単元構成の工夫」という視点で以下のような要素を取り入れながら授業づくりを行った。

【学習の個性化】

- ① 児童生徒の実態に沿い、興味・関心の高まる共通の学習課題を、児童生徒と共有(作成)する手立てが取られている。
- ② 児童生徒一人一人が、学びを広げ、深めることができるような学習課題を児童生徒と共有(作成)する手立てが取られている。
- ③ 児童生徒が、主体的に学習を進めるための手段(学習環境の整備、自由な学習方法の選択が可能、十分な学習時間の確保)が整えられている。
- ④ 児童生徒一人一人が自分の学習履歴を残すことができる手立てが取られている。
- ⑤ ICTが効果的に活用されている。

①については、様々な児童生徒の実態に沿った学習課題であること、②については、その学習課題が児童生徒たちの学びを、広げたり、深めたりすることに耐えうる課題となっているかが重要である。例えば、児童生徒たちの日常生活との関連性が見えやすい課題を設定することで、児童生徒は学んだことを自分たちの生活と結び付けようとしたり、活用しようとしたりすることが期待できる。また、様々な教科の見方・考え方を働かせるような課題を設定することで、学んできたことの関連性に気が付けるようになり、新たな課題に対しても既習を生かして自ら学びを広げ、深めていくことにつながると考える。

③、④、⑤については、前述の「指導の個別化」と同様の要素である。③については、児童生徒が①や②のような学習課題の解決に向かう際に、それが実現できる環境を整えることが必要である。④については、児童生徒が自身の学習が最適になるように調整しながら資質・能力を高め

【実践資料】

小4 社会科指導案
P6、7

中2 数学科指導案
P6、7

小4 算数科指導案
P6

中1 外国語科指導案
P8

ていくために必要である。⑤については、児童生徒にとっての学習改善、教師にとっての指導改善という視点から有効的に活用することが必要である。上記の具体的な内容については、【実践資料】(右記記載)を参照頂きたい。

そして、「協働的な学び」は異なる考え方が組み合わせり、よりよい学びを生み出すことをねらった手立てである。そのために教師は、個々の児童生徒たちの特性等を踏まえたきめ細やかな指導の工夫が必要となる。それにより、児童生徒は多様な他者と協働しながら、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、様々な社会的な変化を乗り越え、持続可能な社会の創り手として、必要な資質・能力を高めていくことができる。そこで、「単元構成の工夫」という視点で以下のような要素を取り入れながら授業づくりを行った。

【協働的な学び】

- ①児童生徒の実態に沿い、興味・関心の高まる共通の学習課題を、児童生徒と共有(作成)する手立てが取られている。
- ②児童生徒にとって、必要感のある協働的な学びが生まれる手立てがとられている。
- ③児童生徒が互いの学習状況を把握できる手立てがとられているか。
- ④児童生徒一人一人が自分の考えをもち(考えが浮かばない、分からないも含む)、互いに話し合うための視点が明確に示されている。
- ⑤ICTが効果的に活用されている。

①については、前述までの「個別最適な学び」と同様の要素であるが、②との関連性が強いため、あわせて説明する。②については、児童生徒が多様な他者と関わり合いながら学ぶことに必要感をもつことが重要である。そのためには、児童生徒にとって、以下のような思考が伴う学習課題や環境を生み出すことが必要であると考えた。ただ、以下の内容は児童生徒の思考の例として示したものである。

- ・自分の考えの妥当性を確かめたい。
- ・共通した学習課題があり、その解決には互いの情報や考えを組み合わせる必要がある。
- ・分からないから教えてもらいたい。
- ・分かったことを教えたい。
- ・他の人の考えを知りたい。 等

③については、①や②のような状況が整った際に、児童生徒一人一人が自分はだれ(何)と関わる必要があるかを選択できるようにすることが重要である。例えば、教師が学習の進め方を板書し、そこに児童生徒が自分は今何に取り組んでいるのかが分かるようにネームプレートを貼ることも、「Aさんは私と同じことをしているから、相談してみよう。」などのように、児童生徒にとって必要感のある協働が生まれると考える。

【実践資料】

小4 社会科指導案

P4、7

中2 数学科指導案

P4、7

小4 算数科指導案

P4、6、7

中1 外国語科指導案

P9

④については、何について話す必要があるのか、またその結果どのようなことが解決されると良いのかが、児童生徒自身の中で明確になっていることが重要である。児童生徒の実態によっては、例えば、協働する前に解決すべき課題を再度確認したり、話し合う視点を示したりすることや、どのようなやり取りが望ましいかロールプレイなどで具体的に示すことも必要であると考ええる。

⑤については、自分に必要なもの（インターネット等）から情報を得たり、他者と自分の考えを比較したりすることで、短時間で必要な協働を行うことができるという点が重要である。教師は、課題の解決に向けてどのような協働を図りたいのかを想定し、それに合わせて児童生徒が情報共有を図ることができるよう ICT の活用場面を設定する。そうすることにより、児童生徒は自分にとって必要感のある考え方を選択しながら、関わり合うことができる考える。上記の具体的な内容については、【実践資料】（右記記載）を参照頂きたい。

資料Aでは、以下のようにも述べられている。

上記の内容をふまえ、当研修センターでは前述までの「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実することを目的とし、各研究授業にお

実際の学校における授業づくりに当たっては、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の要素が組み合わさって実現されていくことが多いと考えられます。

例えば授業の中で「個別最適な学び」の成果を「協働的な学び」に生かし、更にその成果を「個別最適な学び」に還元するなど、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実していくことが大切です。

資料A「4(3)③個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」より抜粋

いて「単元全体のイメージ図」を作成した。各教科の特性に応じて「個別最適な学び」と「協働的な学び」が単元の中でどのように位置付けられ、それらがどのように関連付いているのかが分かるように示している。具体的な内容については、【実践資料】（右記記載）を参照頂きたい。

最後に右図をもとに、「1単位時間の学習過程」における個別最適な学びと協働的な学びについて具体例を示す。

学習の導入では、児童生徒の興味関心を高めるような課題を設定することにより、児童生徒は、学習を深め、広げていこうとする。また、板書等を用いて、どのように学習を進めていくと良いかを示すことにより、児童生徒はそこに立ち返りながら自

分に必要な学びを選択していくことができる。学習の展開では、導入段階で見通しをもった児童生徒が学習履歴を用いることにより、自分に適した

【実践資料】

小4 社会科指導案
P4、7、8

中2 数学科指導案
P4、7

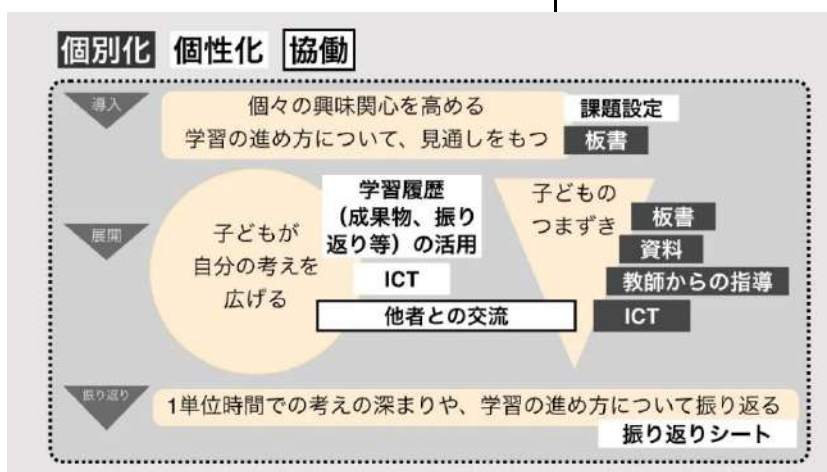
小4 算数科指導案
P4、7

中1 外国語科指導案
P9

小4 社会科指導案
P4

中2 数学科指導案
P4

小4 算数科指導案
P4



方法で考えを深め、広げていくことができる。一方で、想定していた通りには学習が進まず、つまづくこともあり得る。そういった際にも、導入段階で確認した学習の進め方に立ち返らせることで、児童生徒は解決策を導き出すことができる。また、教師はこれまでの評価をもとにすることで、声掛け等が必要な児童生徒に適切な指導を行うことができ、児童生徒は学習を改善していくことができる。また、他者との交流は「分からないことを教えてもらいたい」、「自分とは違う考えだから知りたい」など、どのような学習状況でも目的が明確になることで効果的に作用する。

学習の終盤では、1単位時間やこれまでの学びを振り返らせることが効果的である。児童生徒はこれまでの学びを振り返ることで、次時につながる新しい課題を発見することもある。学習の進め方が自分にとって最適であったかを振り返ることは、その後の学習をより効果的に行うことにつながっていくことができると考える。

ここで示した内容は一例でありつつも、様々な教科で汎用することができる学習過程である。また、「個別最適な学び」と「協働的な学び」が児童生徒の資質・能力を育成することに向けた手立てであるとした時、1単位時間の中に全ての要素を取り入れる必要はなく、目標の達成に向けて単元の指導計画を作成する上で、必要な要素を取り入れることが重要である。上記の具体的な内容については、【実践資料】(右記記載)を参照頂きたい。

【実践資料】小4 社会科指導案
P9～11中2 数学科指導案
P10～12小4 算数科指導案
P9～11中1 外国語科指導案
P12～15